NPO JCP
Japan Conservation Project

NPO JCP NEWS

No. 3
2002. 11. 15

・理事挨拶
・日中共同　敦煌莫高窟壁画の修復協力プロジェクト
　　記事 - 絲綢之路（2002- 秋　No. 40）より
　　報告 - 敦煌莫高窟第 53 窟壁画の修理協力プロジェクトに参加して
・世界の修復界は今－－イギリス－－
・シリーズ 保存修復の現場から
　　「私がいなくなっても仕事は残る」
・新刊紹介『お仕事は文化財』
・JCP 事務局通信

ご 挨 拶

中学の同級生のひとりが修復の仕事をしている関係で、10 年近く前に、現在JCP の副理事長をしている大林賢太郎さんを紹介されたというのがJCP とのかかわりのきっかけです。弁護士ということで、NPO の規則や契約関係についての相談を受けている内に、いつの間にか理事にということになってしまった次第です。

JCP のメンバーの内、美術関係にかかわりのないのは、現在のところ、私だけではないかと思います。
会員のみなさんと話をしていても、「そうこう」とか「とうぶんけん」とか、それは何？　ということが多く、少しずつ手さぐりで文化財の修復の世界を知りつつあるというところです。個人的には日常とは別の世界に触れるというのも気分が変わって面白いものです。
そこに、また、敦煌やアフガニスタンなどの文化財修復の話がでてくるなど、野次馬的には面白い展開で、興味津々といったところです。

ただ、敦煌などのプロジェクトはJCP の存在を世間にアピールし、その基盤を固めていくには大事なものですが、紙とか布を素材とする文化財の修復の専門家を核として立ち上げられたJCP としては、日本の各地域にあり、危機に瀕している書画等の状況を調査・把握して、文化財の保護をはたらきかけていく、そして、できるところから修復を行っていくという地道な作業を積み重ねていく作業がまだ十分ではないようです。

文化財の修復というと、どうしても、公的な資金に頼らざるを得ないと思いますが、国などの財政の状況をからして、多くを期待することができない現在、市民の方から文化財の保存・修復が必要であるという声がでてくることが大事だと思っています。

そういう意味では、日本の各地に、保護・修復を必要とする具体的な文化財をいくつかとりあげて、調査・保存方法・修復方法の策定、文化財的意義の広報、修復費用の募金・積み立てという流れを作り上げ、市民意識の高揚を図り、そこに行政も賛同して参加せざるを得ない状況を作り上げていくということができればいいのではないかと思っています。

専門外の見当はずれのことをいうことが多々あるかと思いますが、よろしく願います。

特定非営利活動法人　ジェー・シー・ピー
理事　白 井　久 明

日中共同　敦煌莫高窟第53窟壁画の修復協力プロジェクト

日本と中国の国交が回復して今年で30年、中国では日本人アーチストによる記念コンサートが行なわれたり、テレビで特別番組が放映されたりしたことは記憶に新しいと思います。

その中国でも敦煌莫高窟と言えば、地球上において屈指の仏教遺跡であり、また文化財の宝庫として人々を惹きつけてやまない地名ではないでしょうか。

この敦煌の文化財を、日中で協力して保護していこうという動きが始まったのは、国交が樹立してから２年後の1974年、当時の安倍外務大臣と中国の呉学謙外相との会談を端緒とします。その後何回か政府間の日中文化交流協議が重ねられた結果、1987年頃より東京国立文化財研究所（現　独立行政法人文化財研究所　東京文化財研究所:以下　東文研と略）と敦煌研究院が中心となって、本格的に敦煌文化財保存修復のため、研究が始まりました。

この日中共同研究は今年から第４期に入りました。第４期は、現在まで蓄積してきた緻密な研究成果を踏まえて、壁画剥落止めの調査と実施の研究段階に入ることになりました。その中でJCPは、壁画修復の施行技術者としてこのプロジェクトに参加することになったのです。

この記念すべき人類の遺産の修復事業に関われることは、修復技術者にとっては誇りであると同時に、身震いするような緊張感を伴うことに違いありません。JCPでは、40年以上国宝や重要文化財修復のキャリアを持つ装潢技術者の田畔徳一会員をプロジェクトリーダーとし、また長年考古遺物や遺構の修理に携わってきた犬竹和会員をメンバーとして、万全の体制で望みました。

以下、今回のプロジェクト推進に当たって、財政面で多大な援助をしていただいた　財団法人　文化財保護振興財団の機関紙「絲綢之路（シルクロード）」に掲載されました、東文研渡邊明義所長の記事を転載させていただくと同時に、田畔会員に２週間の敦煌日誌を紹介して頂きました。

敦煌莫高窟壁画の修理協力　渡邊　明義（独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所長）

――文化財保護振興財団「絲綢之路 2002-秋　No.40」より転載――

敦煌莫高窟壁画の修理協力

去る七月二九日、三泊四日の日程で敦煌研究院を訪ねた。敦煌研究院保護研究所をパートナーとして行われる第四期の共同研究の協議書の署名交換を行うためであるが、この度の同行の我が研究班に、文化財保護振興財団の助成を得ている壁画保存状態の調査と修理設計のために、民間の修理技術者である田畔さんと犬竹さんの二人が加わっている。我々の研究交流から発生した課題に対応するためである。

我が研究所は敦煌研究院との間ですでに十三年間に及ぶ研究交流を続けている。このことが認められ2000年七月に、敦煌で「敦煌で蔵経洞発見、敦煌学100年」の記念式典が開催された際、我が研究所は甘粛省人民政府と国家文物局から特別貢献賞が授与された。式典には私も参加し、栄誉を受けたが、その機会を利用し、李最雄保護研究所長等との間で行われた第四期の共同研究の内容についての説明と討論の会の席で、所長から提出された希望が壁画の修理そのものに対する協力であった。この修理への協力は我々との研究交流が進むに従って期待が強くなったようである。しかし、我々には予算制度上にも、また組織体制上にもこれを可能とする能力を持っていない。多数の壁画の修理に追われている保護研究所の立場を考えると、それが切実な希望であることは理解しても、これをお断りするしかなかったのである。しかし、共同研究の項目の中に修理技術の研究があり、現にそれを行いつつあるのであれば、これまで通り我々の立場を守ると言うのでは、我々との研究交流の中に不満足感を持たせ続けることになる。敦煌研究院の希望に何らかの対応策を講ずべき時点に来ているのである。この問題を示された頃、私の周辺では文化財修理に関する非営利法人JCPの設立の動きがあり、私にも何ほどかの協力の期待がかけられていたことから、これと連携することと、文化財保護振興財団の支援を得ることを想定しつつ、修理協力問題を私に課せられた課題として帰国したのだった。このことを財団の佐野事務局長に伝えると協力できるはずという御返事を得たので、問題は人の確保ということになったのだが、かくしているうち平成十三年に非営利活動法人JCPが発足し、我々の友人もその会員となりはじめたことからこれに希望を託し、このたびの敦煌行きとなったのである。幸い敦煌研究院は我々の提案に好意的であり、私の滞在中に、非営利活動法人の修理参加は我々と敦煌研究院との研究交流から要請された事柄であり、何ら問題はないという国家文物局の見解を引き出したのである。長い研究交流の実績と事前の協議があったとはいえ、このすばやい対応は驚きであった。

修理は我々が研究窟として提供を受けている五三窟を対

象とし、敦煌研究院の修理技術者と共同で行う予定である。五三窟は莫高窟の中でも最低層に位置し、そのためか、塩類の析出の影響がほぼ全面に及んでいる。壁画白色下地層の剥離、壁体の崩落が生じている。1976年に酢酸ビニールエマルジョンの薄い溶液で修理を行ったが、今はそれが病害となり、別の形の損傷を作り出している。この病害は取り除くことは出来ないので、変化してしまった壁画の薄い層をそのまま接着安定化せざるを得ない。関係者が新しい技術対策に関心を寄せる所以である。修理協力と言う場面をつくり出すことで彼我の関心は一つに集中することにもなるのである。

我々に同行した田畔さんは、奈良国立博物館の修理所で仕事をしている書画修理の専門家であり、犬竹さんは我が研究所の修復技術部で長く非常勤職員を勤め、その後、文化財保護振興財団の助成を得て二年間の英国留学を果たした経歴を持っている。私がこの度の仕事の中心となって活躍することを期待している人である。

JCPは芽を出したばかりの組織であり、確かな実績も乏しい。しかし、人も組織も責任ある活躍の場を得て成長し得るものであろう。文化財修理の国際協力に新しい要素を作り出す意味でも多くの方々の支援をお願いしたいと思っている。

渡邊明義先生プロフィール

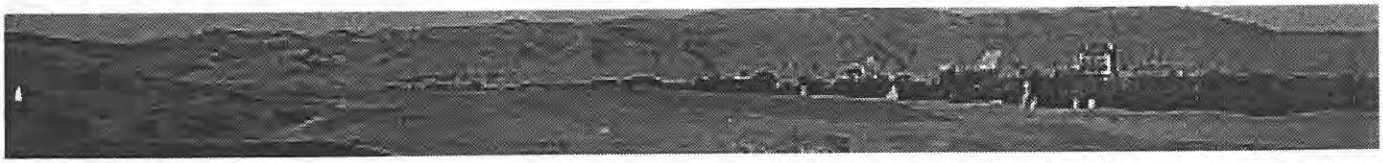
1960年3月　東京藝術大学美術学部　専攻科修了
1989年4月　文化庁文化財保護部美術工芸課長
1992年7月　東京国立博物館学芸部長
1994年4月　文化庁文化財保護部文化財監査官
1996年4月　東京国立文化財研究所長
2000年4月　独立行政法人　文化財研究所理事長
（東京文化財研究所長）

報告 ――敦煌莫高窟　壁画保存プロジェクトに参加して――

JCP会員　田畔　徳一

日中共同による「第4期敦煌莫高窟第194窟、第53窟の保護に関する共同研究」が、今年度より4年計画で始まった。過去の第3期までは、環境調査や材料の研究等を行ってきたが、今回よりデジタル化による修復記録管理システムの開発および修復材料とその施工技術開発を目的として事業が始められた。それと同時に53窟の壁画修復事業が実施されることになり、東文研の渡邊明義所長、青木繁夫修復技術部長、JCPの三輪嘉六理事長らのご尽力により、東文研内の会議において修理担当者として認められ参加することになった。

第4期の初年度に当たる今年は、日本の修理技術者が調査に参加して現地を実際に見て、修復計画を作成する基礎とすることと、敦煌側にJCPを認知してもらうことが重要な目的のひとつであった。



7月29日（月）

午前10時35分成田を出発。一行は次のメンバーである。

東京文化財研究所：渡邊明義所長、川尻秀行管理課長、青木繁夫修復技術部長、岡田健文化財保存修復国際センター国際情報研究室長、森井順之修復技術部研究員、

㈱国際航業：小日置氏、楊氏。

NPO JCP：田畔徳一、犬竹和。

北京経由にてその日の夕刻8時頃敦煌空港着。

7月30日（火）

朝、敦煌研究院迎えのマイクロバスにてホテルを出発。

9:30より研究院の応接室にて挨拶。樊錦詩院長、李最雄副院長の他10数名が出席。

挨拶に立った渡邊所長より、まず最初にNPO JCPの紹介があった。

渡邊所長は、日本における国と民間の組織との関係にも触れ、第4期共同研究の技術協力団体として、中国側にJCPを紹介し、53窟の壁画修復に修復技術者として参加を許可していただけるように要請してくださった。その時、責任の重大さを痛感し、背筋に寒さを憶え身を硬くして聞き入っていた。

7月31日（水）

午後2時35分　調印式。

敦煌研究院；　樊錦詩院長、李最雄副院長以下多数出席。

日本側；渡邊所長以下9名出席。

合意書類に署名、交換後、会談が行われた。

渡邊所長はその会談の中で、再度次のようにJCPを紹介してくださった。

敦煌研究院との間で2年前に莫高窟壁画修理の話が持ち上がった時には、まだ日本にはJCPのような非営利の文化

財保存支援組織はなく、既成の工房のあり方では国際交流の期待に充分には答えられないと思っていた。NPO／NGOのような組織が文化財修復にも必要があると考えていたその矢先、JCPが設立された。自分は今後とも協力し、JCPを育てていくつもりであり、JCPから派遣する人材にも協力したいと思っている。また東文研はいくつかの財団を通じて財政面において援助するとともに、技術的な支援についても全面的な協力を惜しまない、等熱心に話をされた。

またその席上青木部長より、最も重要になる修復材料等についての研究、修理前の記録の取り方、など日中共同研究における合意事項について話があった。また日中で同じ認識を持つため用語集作成の必要性などを提言された。

敦煌研究院　李副院長よりは、このプロジェクトの重要性に言及し、修復に対する学術的な交流が一層進み、大きな成果を生むことが期待されている、との談話があった。

8月1日（木）

渡邊所長の帰国を明日に控え、所長招待のパーティーが開かれた。その頃には、JCP（田畔）も院長・所長と同じテーブルに同席するようになっていた。

席上、李副院長より談話があり、国家文物局からのメッセージが伝えられた。

長年にわたり続いている敦煌研究院と東京文化財研究所との信頼関係のもと、JCPの参加を認め、敦煌研究院の監督指導のもと成果をあげてほしいと言うものであった。

8月2日（金）～8月8日（木）

いよいよ第53窟において作業開始である。青木部長を中心に、剥落止剤として可能性のある材料の施工実験を、北壁左下方の一部で行った。

53窟は、莫高窟の中でも珍しく浸水したことがある窟で、塩類風化が激しく、「湿度が極めて低い環境に長年置かれた文化財」という固定観念では見方を誤ることになる。また私が今まで携わってきた伝世品と違い、大地と結びついたダイナミックな文化財は、繊細さだけでは対処しきれない様々な要因を含んでいる。そのような中で、考古の修理に携わってきた犬竹会員の存在は、自分の問いかけに新たな視点を開いてくれるものであった。分野を超えた技術者同士の連携はNPOのめざすひとつの目標だが、確かに新しい可能性を含んでいることをここにおいて実感させられた。

この作業は、30年間莫高窟の修理作業を続けてこられた段修業先生と若い楊先生、唐先生等の協力を得て行われた。勿論日中間で修理に対する考え方の違いなどは存在するが、過酷な環境下で長年修理に携わってきた段先生達の意見は深く傾聴すべきものがある。文化財は置かれた環境の風ひとつ、水ひとつで変化するものであり、その意味では現地の技術者の経験に最も敬意がはらわれるべきであろう。

作業の詳しい内容は東文研の報告に譲るが、今後彼等の意見を尊重しつつ、より良い保存方法に向けて日本側が少しでも貢献できるよう努力していきたいと思っている。

我々が施工実験を行っている間もあまり広くない53窟内では、国際航業の小日置氏と楊氏による修復前の写真撮影、森井研究員による53窟内の立体的な温湿度の測定が続けられていた。

前列左より川尻秀行管理課長、渡邊明義所長、岡田健国際保存修復協力センター国際情報研究室長、後列左より田畔徳一会員、犬竹和会員、国際航業小日置氏、森井順之修復技術部研究員。

8月9日（金）

敦煌研究院に今回の「共同研究」の最終報告をした。

その中に、来年は東文研と共同でJCPが参加すること。今秋、李副院長来日時にJCP理事長と東文研所長と共に今後の方針について相談すること。等が正式に報告された。

8月10日（土）

敦煌研究院に帰国の挨拶をし、10時30分、敦煌空港を離陸。しばらくは厚い雲に覆われ、着陸時には今にも砂に飲み込まれそうに見えた町並みも望めず、しばらくぼんやりと成田を出発して以来の色々な出来事を振り返っていた。

ようやく一息つき、JCPがこの第4期事業に正式に参加できると言う実感が湧いて来ると共に、JCPを中国側に認知してもらい、来年より正式な参加の許可を得るために力を尽くしてくださった渡邊所長、青木部長、そしてその意思を的確に通訳してくださった岡田室長、よきアドバイスしてくださった森井研究員など、それぞれ個々の場面を思い返しながら、この共同研究への参加は、将来の日中の文化財保護協力発展に大いに貢献するであろうことを実感した。

気がつくと何時の間にか雲が切れ切れになり、そのうち薄いガスも払われて、明暗の波状の襞が幾重にも見えた。そして飛行機は、遥かに続く砂漠の上空を東に向かって飛び続けていた。

謝辞：最後になりましたが、今回のプロジェクト参加にあたり多大なご尽力を頂いた、東京文化財研究所　渡邊明義所長、岡本親宣管理部長（当時）、川尻秀行管理課長、青木繁夫修復技術部長、大塚英明協力調整官、中野照男美術部長、岡田健文化財保存修復国際センター国際情報研究室長、森井順之修復技術部研究員、我々の参加を受け入れて下さいました、敦煌研究院の樊錦詩院長、李最雄副院長、そして何かとお世話くださいました蘇伯民氏、徐淑青氏、通訳をしてくださった丁氏に、またこのプロジェクトを遂行するにあたり、財政面で援助をして下さいました（財）文化財保護振興財団各位に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

世界の修復界は今　第2弾　イギリス

「イギリスにおけるペーパー・コンサバター教育」

坂本　雅美

「どうすれば修復家になれるのだろう？」「どんな教育機関があるのだろう？」という問いに対して、10年前にはあちらこちらに足を運んで連絡先を調べ、手紙を書き、返事を待ち、カタログを読んではまた手紙を書くという時間のかかることをやっていた。今は全く専門知識がなくても英語がある程度理解できればかなりの情報がインターネットを通して得られる。さらに詳しく知りたければ各ホームページから直接担当者にメールで質問をすることもできる。ここでは各教育機関のあれこれを比較するより、イギリスのペーパー・コンサベーションの現状を踏まえその教育システムをみてみたい。

コンサベーションに関する豊富な情報が簡単に入手できるようになった現在でも、重要なのはそれら情報を選択し整理して活用しうる基礎能力である。この基本がなければあふれる情報に惑わされるだけだ。基本となる科学・美術の知識と技術、処置のための実技を学ぶのに、整った教育システムは非常に効果的であるのはいうまでもない。

教育機関のうちいわゆる「学校（コース）」で学ぶ内容は科学、コンサベーション、美術史の3つが柱になっている。修士レベル相当の学校についていえば、様々な専門分野から学生が集まる。すべての学生は3つの分野にわたる共通の基礎を学び、その後、各自の得意とする分野に重心を傾けつつも他分野をバランスよく取り込みつつ学習する。学校では専門の指導員がそれぞれの分野の教育にあたるが、限られた期間（約2年）における学校の設備、指導内容には限界がある。そこで欠かせないのが現場における「研修」である。

研修は多くの場合、学校の休暇中に行なわれる。この研修が教育システムの中の重要な役割を果たす。研修生受け入れ機関の地域や規模は様々であるが博物館、美術館、図書館、文書館などである。研修先には必ず研修生を担当する現場の指導者がいて、研修生は指導のもと効果的に組まれたメニューをこなす。ほとんどの受け入れ機関が研修制度をその機関の責務としているため研修生の指導にも熱心で、研修生はただの「おじゃまむし」ではなく組織の一員として機能するようになっている。研修生は研修先で専門家や同僚とのネットワークが広がり、その分だけ多くの知見が得られる。学校では講義を受け、文献調査、実験、実技などを行なう。すべて理想的とはいかないまでも常に守られた環境の中で与えられたカリキュラムを確実に消化してゆく。一方、現場には豊富な対象物と問題と限界が共存する。それらに直面し、考え、議論し、対処するという貴重な機会に遭遇する場が「研修」である。学校に在籍している時から、現場つまり社会への適応が促されているわけである。

ところが、学校を修了すると完成されたコンサバターが自動的にできあがっているというわけではない。大きなコンサベーション部門を持つ機関に就職できればそこで熟練者に囲まれキャリアを積めるが、多くの場合は再びいろいろな機関で中ー長期の研修を受けたり、個人の工房でアシスタントとして実際の仕事を覚えたりして経験をつんでいく。イギリスの場合、初期教育システムは学校とそれを補助する研修制度があって成り立っており、それは学校卒業後も続く（期間は個人差あり）といえる。学校在籍中の教育の目的は完璧なコンサバターを短期間に作り上げることではなく、将来に向けて安定した基礎を築き、適性を見極めることにあるのだと思われる。各人その基礎を元にそれぞれの現場で経験を重ねさらに応用力や判断力を磨いていく必要がある。

ところで教育機関は学生だけを対象とするのではなく、経験のあるコンサバターを対象に短期コースやワークショップを他機関の専門家と組んで開催することも多い。情報交換、勉強の機会を提供するために広く門戸を開いているのである。職業上、コンサバターには情報収集や勉強は欠かせない。そのための機会は本人が望めばリタイアするまで利用できる。

以上、教育システムについてかなり手短にまとめてしまったため多少極端な内容になってしまったかもしれない。参考のためイギリスの教育機関（学校のみ）のHP一覧（United Kingdom Institute for ConservationのHP中のリスト）をみることができるサイトを挙げる。

http://www.ukic.org.uk/training.html

「コンサベーション(conservation)」および「コンサバター(conservator)」については文中敢えてカタカナを用いた．用語の意味はThe American Institute for Conservation of Historic and Artistic Works（ＡＩＣ）その他の用語定義を参考にした。以下にコンサベーション関係の活動団体の倫理規定（「コンサバター」などの言葉の定義など含む）が参照できるHPを挙げておく。

http://aic.stanford.edu/geninfo/defin.html http://palimpsest.stanford.edu/byorg/ecco/library/ethics.html

Conservation: 文化財の保存に関わる専門分野。文化財の審美的価値、歴史的価値をふまえ原形を尊重し調査、予防的措置、処置、記録作成などを行なう。

Conservator: コンサベーションに携わる専門家

坂本雅美さんプロフィール
紙本保存修復家
筑波大学芸術専門学群卒業、東京藝術大学大学院修了、Newscastle Polytechnic（現在University of Northumbria）修了
東京国立文化財研究所修復技術部　研究補佐員
東京国立博物館学芸部企画課　研究補佐員を経て1998年以降フリーとして活動

「私がいなくなっても仕事は残る」

（有）山領絵画修復工房代表　山領　まりさん

油彩画から修復へ

東京芸術大学で油絵を学んでいた。1958年、卒業して、さらに上の専攻科へ進んだ。当時はまだ大学院はなく専攻科といったのである。美術学部油画科専攻科が正式名称だ。翌年、学生結婚。60年に専攻科を卒業し、ちょうど副手を募集中だった同学科の油画技法・材料研究室に勤めるようになった。

そして、間もなく子ども2人が生まれた。「絵を描くという制作そのものに集中できない環境になってしまったわけです。そのころ研究室では修復の仕事もほんの少しだけどやっていました。鎌倉で高橋由一の展覧会が開かれることになったのですが、博物館所蔵の出品予定の作品が黄変していたのです。その修復のため研究室の寺田春弌先生が褐色になったニスを洗っていたのです。これはおもしろいと思ったのが修復を始めるきっかけになりました」。

また、洋画の修復などは一般的ではなかった。美術館から依頼がくることは皆無、画商などから細々と注文がくる程度だった。そんな時代が何年も続いたが、それでも確かな糸口を感じていた。自分の手で修復をやっていこうと決心した。70年、大学を辞して東京・武蔵野市の自宅に工房を設立した。たった一人の門出である。

10年に一度、節目があった

機を同じくしてアメリカに接収されていた大量の「戦争画」が東京国立近代美術館に返還された。ぼろぼろで修復が必要だった。「私も含めて5人でその仕事を受けました。期間的にずいぶん長いものでしたが、これで腕を磨きました」。そして「そう、10年おきぐらいに大きな節目があるんですよ」と続けた。

80年代初め、東京国立近代美術館に暴漢が侵入し梅原龍三郎や岡本太郎の絵など20数点をパイプで手当たりしだいに壊すという事件が起きた。その修復を担当する。

90年初頭。古茂田守介の焼失したといわれた作品群を未亡人が保存していることが分かり、その修復を目黒区から依頼される。このころ、工房を会社組織にした。スタッフも増やした。運転担当の人や非常勤の協力者も含めると10人規模である。

2000年、パリの日本館で藤田嗣治の『欧人渡来の図』『馬の図』の修復プロジェクトに参加した。3ヶ月間向こうに住んで、フランスの修復家と日本の3つの工房が共同で修復作業をしたのである。

・1960年　東京芸術大学美術学部油画科専攻科卒業
・同学科研究室非常勤助手、講師を経て70年、山領絵画修復工房設立。
・数回にわたり海外で修復技術を学ぶ。
・90年代に東京女子美術大学、多摩美術大学、日大芸術学部の非常勤講師を歴任。
・現在、東北芸術工科大学非常勤講師。

「1年に2枚ずつ7年間もかけた明治村の『十字架の道行き』の修復も思い出に残る仕事でした。真鍮の上に書かれたドーム型の絵ですが、キリストの裁判から十字架上での死、復活までを描いた14枚の連作で工房の歩んできた歴史が刻み込まれているような気がします」。

ちなみに2000年から現在までに依頼されている修復は、国立近代美術館・北川民次作品、東京国立博物館・亜欧堂田善銅版作品群、岐阜美術館・ルドン作品群、高知県立美術館水害作品群などである。

また、工房は今、油彩画のほかに素描、水彩画、版画の保存修復にも力を入れている。「最近個人的には、日本伝統の浮世絵への保存修復に大変興味があります。浮世絵というのは修復の面では、あまり取り上げられていなかった分野なのです」と山領さん。

経験を積むほど難しくなる

「修復作業には一つとして同じものがありません。1点1点その方法が異なってくる。それがおもしろさでもあります。」「修復の難しさですか。私たちは作家の意図している画面をまず尊重しなければならない立場にいます。こちらの判断を入れてはいけない。私も絵を描いてきた人間として、修復の過程で、この部分は技法のルールにのっとっていないからといって、オーソドックスなルール通りに直したらいけないのです。そこが特に洋画の難しいところでしょう。実際、仕事はやればやるほど、経験を積めば積むほど難しくなるような気がするんですよ。例えば洗浄一つとっても、どこまで洗うか。洗いすぎたからといって後から色を塗るわけにはいきません」。

ショートヘアの白髪が似合う。工房の隣室の静かな居間で、山領さんは穏やかに、それでいて明瞭に語ってくれた。そのさりげない一言一言に、ずしりとした修復作業40年の重みがある。

「作品はできた後、年月を経て変化します。作品にあとから付随的についたゴミや余分なものを取り除いていく。でも、作品自体も経年変化して劣化していきます。描いた当初の形、つまりゼロ地点には戻れないのですが、ではどこの段階まで修復するか、最後はそこに行き着きます。それこそ修復家が問われることなのです」。

今後、将来的には、博物館自体の保存環境を整えるといった点に重点が置かれるようになるだろうが、手仕事としての修復作業の重要性が決して失われることはないだろう。だからこそ、真剣に技術と知識を磨かなければならないという。

「私たちがいなくなっても、私たちの仕事は残るのですから」。

そういって山領さんはインタビューを結んだ。

書籍紹介

『お仕事は文化財――仕事場拝見インタビュー』

貴重な遺産を守る仕事人の心意気を伝える

釘田寿一著・週刊朝日「日本の国宝」編集部編・本文253ページ・朝日新聞社

本書は週刊朝日百科「日本の国宝」創刊号（1997年2月23日号）～60号（1998年4月19日号）に連載されたものに加筆したものである。本書に収められた人は全部で60人。文化財関係の仕事に従事しているというと、その道何十年という職人や伝統工芸の後継者を想像しがちである。もちろん、ここには法輪寺三重塔の再建などを手がけた著名な宮大工・小川三夫さんをはじめ、瓦葺き職人、京仏師、庭師、表具師、唐紙師、畳職人なども登場するが、これまでこの種の本では扱われなかったジャンルの人々が取り上げられているのが楽しい。ちょっと列挙してみよう。定期観光バスガイド、美術品輸送、展覧会保険、テレビ番組プロデューサー、重機操縦、測量システム開発、ミュージアムティーチャー、文化財保安官、ＣＧ復元、奈良の土産物店、姫路城の語り部、文化財防犯、日本語ガイド、寺宝のデータベース化などに携わる人たちだ。

定期観光バスガイドの酒井ひろみさんは、英米文学を専攻していた大学3年生のころ、奈良交通が募集した観光バスの学生アルバイトのガイドに応募して以来、この仕事にはまってしまった。古都奈良の歴史を親しみやすく案内するのも立派な文化財保護活動だと著者はいうのである。

また、白石正俊さんは、ユンボの名で知られる重機をあやつって遺跡を覆う表土をミリ単位の精度ではぎ取る。普通の土木工事では指示通りの幅と深さでざっくり掘ればいいのだが、発掘調査ではそうはいかない。女性の肌をなでるようにはいでいくのがこつだとか。今では調査員から重機の魔術師と呼ばれている。

文化財の保護は、名人といわれるような技の職人や、専門家だけの領域ではない。かつてはなかった現代風の職業でもいいのだ。自分の特技や趣味を生かすことによって、あなたにも貴重な文化財の保護や修復に参加できる機会があるのだということを示唆してくれる書でもある。

（フリージャーナリスト・浜名　純）

JCP事務局通信

事務局日々

2002.6.13	愛媛県曹洞宗教化センター講演会にて、大林副理事長講演
2002.6.15	日大教室にて、平成14年度総会開催
2002.6.15,16	文化財保存修復学会にてブース出展
2002.6.26～29	韓国中央博物館壁画修理協力（大林）
2002.7.5	東文研にて敦煌会議（三輪、八木）
2002.7.6～20	韓国中央博物館壁画修理協力（大林他）
2002.7.23	NPOマネージメントセミナー（八木）
2002.8.26～30	韓国中央博物館壁画修理協力（大林）
2002.8.28	東文研にて「国際紙の研修」打ち合わせ
2002.9.8	JCP運営会議（JCP理事・運営会員）
2002.9.21	国際紙の研修ミーティング（紙の研修プロジェクトメンバー）
2002.10.1～17	「国際紙の研修」実技指導の講師派遣
2002.10.20～26	韓国中央博物館壁画修理協力（大林他）
2002.11.2～4	台湾国立文化資産研究中心シンポジウムにて講演（大林他1名）

JCPからのお知らせ

・先日皆様にもボランティアを呼びかけました、東文研・イクロム主催「紙の国際研修」は、会員から講師7名、技術補佐ボランティア2名、通訳ボランティア1名を派遣し、無事終了いたしました。次回のニュースレターでは、この「紙の国際研修」を中心にお伝えしたいと思います。
また、この時コーディネーターをつとめた三浦功美子氏は、現在事務局スタッフとして働いてくれています。今後はニュースレター編集でも活躍してくれることと思います。より充実した紙面をご期待ください。
・来年3月1日（土）に、東京都立美術館講堂においてJCP第1回シンポジウム開催を予定しております。
詳細は、また追ってお知らせいたします。

・関連団体イベント情報

資料保存協議会　第16回セミナー
テーマ：「治す」から「防ぐ」へ－IFLA図書館資料の予防的保存対策の原則
講師：竹内秀樹氏（国立国会図書館関西館）
日時：2002年12月20日（金）18:30より
場所：新宿区市谷砂土原1-1　ルーテル市ヶ谷センター
定員：70名
参加申し込み：
HP(http://www.con-con.org/announcement.htm)よりメールで。またはFAX（03-5976-5463）

ご入会ありがとうございました。

（平成14年11月15日現在入会者数）

□登録会員　100名（運営会員を含む）

□一般会員　94名

□賛助会員　12件
㈱岡墨光堂
㈲坂田墨珠堂
昭和不動産株式会社
日本通運株式会社
美術品事業部
羽生　卓史
百元　節
㈲文化財保存
溝川商店
歴史遺産研究センター
他　個人3名
（アイウエオ順・敬称略）

ご寄附をありがとうございました。

・堀田圭吾様　・田畦徳一様　・山本記子様
・三浦功美子様・大林賢太郎様

NPO JCPの活動に参加してみませんか？

□ **登録会員**：年会費　7,000円
文化財保存に関わる専門的技能を持ち、プロジェクト遂行に協力する個人。
登録会員は文化財の保存事業を行うための専門家で，文化財に直接関わる専門家とは限りません。

□ **一般会員**：年会費　5,000円
この法人の目的に賛同し、支援する個人。

□ **賛助会員**：年会費　一口50,000円
この法人の目的に賛同し、支援する団体、個人。

会員特典　・季刊情報誌の送付
・講演会／研修会等への優先参加

※入会ご希望の方は、下記のファックス、お電話、メールにて申し込み用紙をご請求下さい。おり返し資料をお送りいたします。
また、ホームページからでも入会申し込みができます。
TEL/FAX：03-5832-5440
E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org　URL:www.jcpnpo.org

※この他にも、随時寄附を受け付けております。下記の郵便振替、あるいは銀行口座をご利用下さい。
・郵便振替　00120-4-10545　NPO JCP　・みずほ銀行　根津駅前支店　普通預金　1727893

NPO JCP NEWS
第3号
2002年11月20日発行

特定非営利活動法人　ジェー・シー・ピー
〒113-0031
文京区根津2-18-6-102
TEL/FAX：03-5832-5440
E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org
URL: www.jcpnpo.org

＜理　事＞
三輪嘉六（理事長）
大林賢太郎（副理事長）
増澤文武
白井久明
伊原恵司

＜編集協力＞　浜名　純（牧童舎）・嶋根隆一

＜事務局＞
・八木三香　・三浦功美子　・松本洋子